



天皇杯に輝く名茶 そのぎ茶

～その歩みをたずねて～

東彼杵町史談会会員 谷山 満三郎

7. 赤木原の開拓

燦^{さん}さんと照^{ひか}る太陽の光を浴びながら、赤木原集団茶園を目指して松山口から車を走らせる。

途中、萌香園製茶工場があり、その下の方に、広域農道、大村・東彼杵道路が通じている。(このレポートでは、大村・東彼農道と略記する。)



完成した長崎県第一の赤木原集団茶園

大村・東彼農道は、すでに昭和の大合併以前から千綿地区住民の

熱望であり、或は「千綿中央線」と仮称し、或は「何々郷線」と仮称して、溝上喜世人千綿村長当時から今日に至るまで実に60年の長きに亘る関係住民の熱意が此処に実現したのである。心から喜ぶとともに、今後の活用を期待するところである。

筆者は、現役当時、甲信越の旅行の折に、長野県南部にある諏訪湖畔を通過したことがあった。休憩の折に、聞いたのは諏訪湖畔の周囲は、医療精密機器の生産が盛んで、その生産額は世界の生産額の22%を占めているとの話があったことが記憶に残っている。条件として風色明媚で、大気清澄であり、地震が少なく、且つ弱いなどの好条件があるとのこと。このことから考えると、いま大村・東彼農道沿線は、諏訪湖畔とそっくりではないか。話題が逸れて申し訳ない。

いま赤木原頭に立つ。

眼下には長崎県下第一の集団茶園が広がる。

現在の赤木集団茶園は道路、地形、区画整理、給排水施設、防霜ファン等、近代化され県下最大の面積と施設が整備された集団茶園である。

ここは、明治維新までは大村藩所有林野であったろうから、明治維新に際して長崎営林署所管となり、ある時期までは、師団の演習場にも使われていたような古老の話もあったが、赤木原が活用され始めたのは、昭和8年、次の表彰状によると、

長崎県茶業研究会会長田中富太郎授与

「茶業開発ニ尽粹シ、ソノ実績顕著ナリ」

彼杵村 野田卯太郎 とある。

野田卯太郎氏は、元治元年（1864年）佐賀藩不動山村（現在佐賀県嬉野市不動山）に生まれ長じて、彼杵村に来て以来、鍛冶職の仕事の合間に茶業に勤め、その発展に尽くしてきた。

県茶業研究会会長の表彰状には更に、『資性温厚ニシテ夙ニ茶業ノ改良発達ニ努メ、大正三年（一九一四年）茶園ヲ開キ、自ラ率先シテ茶樹栽培並ニ製茶法ノ改良ヲ奨メ・・・』とあり、昭和天皇の御大典記念として、広大な原野が広がる赤木原の開拓を決意したのであった。

時、恰も第一次世界大戦後の深刻な不況期であり、殊に農村恐慌による土地売り、娘までも仕事に出すという時期で、農家農村に仕事場がなく、自作農家でも米を買うという深刻な農家の状況であった。このとき知勇を振り絞って、荒蕪の広野に鋤を打ち込もうとする野田青年の壮勇を見習うべきは現在にも当てはまるのではなかろうか。

野田卯太郎氏の赤木原開拓は、

起 工 昭和3年9月

竣 工 昭和6年12月

御大典記念茶園碑には、次のように刻まれている。

佐賀県不動山ノ産、明治二十二年二十四才ニシテ彼杵村ニ來リ鍛冶職ノ傍ラ専ラ農業ニ従事、茲ニ御大典記念トシテ本茶園ヲ設置セリ

昭和七年四月二十四日

野田卯太郎



野田卯太郎氏

落成式に招かれた当時の村長福田有信は祝辞の中で、「二十四才の青年が茶業に志を托し、それこそ寸時も無駄なく如何なる困難にも負けることなく、この大事業を完成せられたのは、村勢発展のためにも、未永く語り継がなければならない。」と結んでいる。

野田卯太郎翁は、その生涯を茶園の改善、製茶の改良普及に努め、その発展に大きな貢献をなされた。昭和8年に長崎県茶業研究会より翌9年には、長崎県知事賞を受けられた。昭和16年（1941年）に当時、農業界で最高の名誉とされた「大日本農会総裁」から有功賞章が贈与されたのである。

晩年まで、公共のために尽くし、昭和30年10月22日、91才の天寿を全うされたのである。

資料 東彼杵町誌「水と緑と道」

附記 永い歴史のある彼杵茶市は5月11日（金）、12日（土）、13日（日）に彼杵街並で最大に催されました。

【平成24年5月15日発行】